



口絵15 「寒林重汀図」近景左

〔館蔵品研究〕（伝）董源「寒林重汀図」の観察と基礎的考察（下）

竹浪 遠

はじめに

一 本図の概要および関連文献、伝来

二 作品観察と考察

（一）画絹と保存状態

（二）各部の観察と考察

（三）様式・制作年代と絵画史上の意義

（以上、本紀要三号掲載）

三 「寒林重汀図」と江南の雪景図

前章までは、「寒林重汀図」の伝来、保存状態、描写内容、表現技法、制作年代などについて考察を行ってきた。⁶⁶ その結果、伝来の過程、使用されている画絹の種類と修理状況、各部の表現に見られる模写的要素と原本由来の要素などを明らかにし、本図が董源およびその時代の江南山水画の様式をよく伝える貴重な作品であることを論証した。また、模写の年代については南宋後期頃との見通しを示した。

さらに、白色顔料を飛沫状に散布して、降雪を表現していることも分かった。このことは本図の描写内容の面だけでなく、以下に述べるように絵画的な位置付けを考える上でも重要な意味を含んでいる。本章ではこの降雪表現に注目し、その絵画的意義を考察して本稿の締めくくりとしたい。

米芾『画史』には、北宋の後期に江南や蜀の雪景図が、唐の王維（六九九―七五九）の名のもとに盛んに流通していたことが記されている。

〔前略〕世俗以蜀中画驪網図、劍門関図為王維甚衆。又多以江南人所画雪図、命為王維、但見筆清秀者即命之「中略」。長安李氏雪図、与孫載道字積中家雪図、一同命之為王維也。其他貴侯家不可勝数、諒非如是之衆也。

（画品叢書本、以下引用同本）

ここで言われる蜀や江南の画というのは、それぞれの地方において一時代前の五代に制作された絵画とみられ、画風もより古体を残すことから王維筆とされたものと考えられる。⁶⁷ それらは貴人・士大夫に多く收藏されており、その入手をめぐる加熱ぶりも『画史』に記述がある。

王晋卿「王詵」收江南画小雪山二軸、易余歲余。小木一筆纏起、作
枝葉如草書不俗、後易書与蘇之友。李伯時「李公麟」云、其父所收
失去。知在晋卿家、不知歸余、恨不得易。云王維筆非也。

范大珪字君錫、富鄭公壻。同行相国寺、以七白金常壳処買得雪図。
破碎甚古、如世所謂王維者。劉伯玉相值、笑問買何物、因衆中展示。
伯玉曰、此誰筆。余曰王維。伯玉曰然、適行一遭不見、豈有所歸乎。
余仮范人持之、良久、并范不見。翌日去取、云已送西京槽。同行梅
子平大怒曰、吾證也、可理於官、豈有此理。余笑曰、吾故人也、因
以贈之。今二十年矣、范卒已十年、不知所在。

前者では、米芾が王詵（?）一〇六九〜一〇九九（?）と交換して入
手した「江南画小雪山二軸」は、李公麟（一〇四九?〜一一〇六）の父
の旧蔵品で、李公麟はそれを再び手に入れられなかったことを嘆いてい
る。後者では、米芾が友人の范大珪と一緒に都・開封の相国寺の市に出
かけ、所謂伝王維の雪図を買い、范氏の従者に預けていたところ、結局
范氏はそのまま持ち帰って自分の物にしてしまったという一件が記され
ている。

このように、北宋後期には江南や蜀地方の雪景図が、王維の伝称のも
と、収集家達の垂涎の的となっていたことが明らかであり、その背景に
は五代の江南と蜀の山水画において、雪景図が主要な画題の一つとして
盛んに制作されていた状況があると考えられる。

董源自身、保大年間（九四三〜九五七）の元日の大雪に南唐中主が雪
見の宴を催した際、命をうけて周文矩、徐崇嗣らの宫廷画家たちと宴の
様子を合作した有名な故事が、北宋・鄭文宝『江表志』（一一〇一年序）

などに伝えられており、董源は「雪竹寒林」を分担している。

「前略」保大五「七」年元日、天忽大雪、上召太弟以下登樓展宴、
咸命賦詩。令中使就私第賜進士李建勳。建勳方会中書舍人徐鉉、勤
政殿學士張義方于溪亭、即時和進。元宗乃召建勳、鉉、義方同入、
夜分方散。侍臣皆有興咏、徐鉉為前後序。太弟合為一図集名公図繪、
曲尽一時之妙。御容、高冲古主之。太弟以下侍臣法部糸竹、周文矩
主之。樓閣宮殿、朱澄主之。雪竹寒林、董元「董源」主之。池沼禽
魚、徐崇嗣主之。図成、無非絶筆「後略」。

（説郭、商務印書館排印本）

合作の相手は人物画家の高冲古と周文矩、屋木画家の朱澄、花鳥画家
の徐崇嗣で、その中において董源が雪竹や寒林を分担したのは、当然、
それらの題材を得意としていたためと考えられる。

現存作品における江南山水面の雪景表現としては、「江行初雪図巻」
（図63）が知られていたが、今回さらに「寒林重汀図」にも降雪の表現
が確認されたことは、江南山水画における雪景図の盛行を作品の側から
改めて裏付けるものと言える。そこで、これら二作品を起点に、南唐の
雪景図の状況を考察してみたい。

「寒林重汀図」と「江行初雪図巻」の画風に親近性が認められること
は、第二章において樹木、竹、葦などの描法に指摘した通りであり、雪
とそれを含む天候の表現にも共通性が認められた。

両図とも降雪の様を白色顔料の飛沫を散布して表現している。「寒林
重汀図」では、山岳や土坡などに積雪の表現は確認できず、「江行初雪
図巻」では、樹木、下草、土坡などに白色顔料による積雪表現があるも

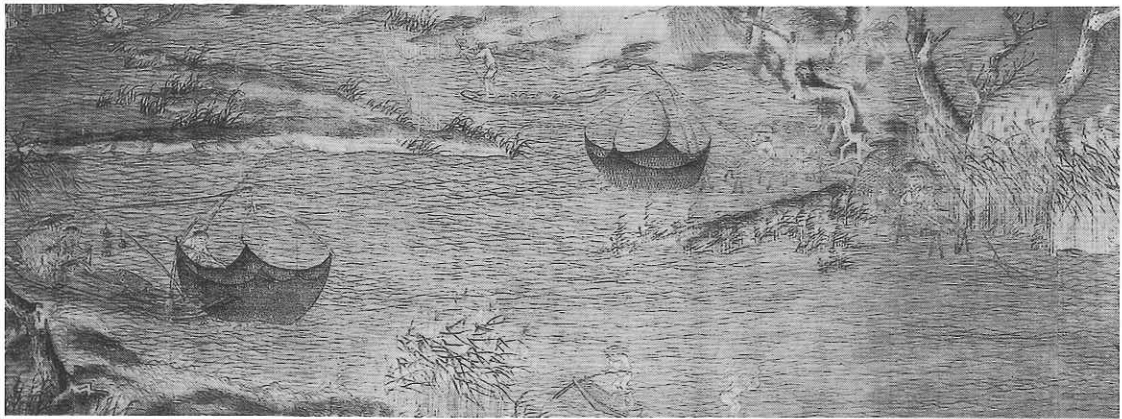
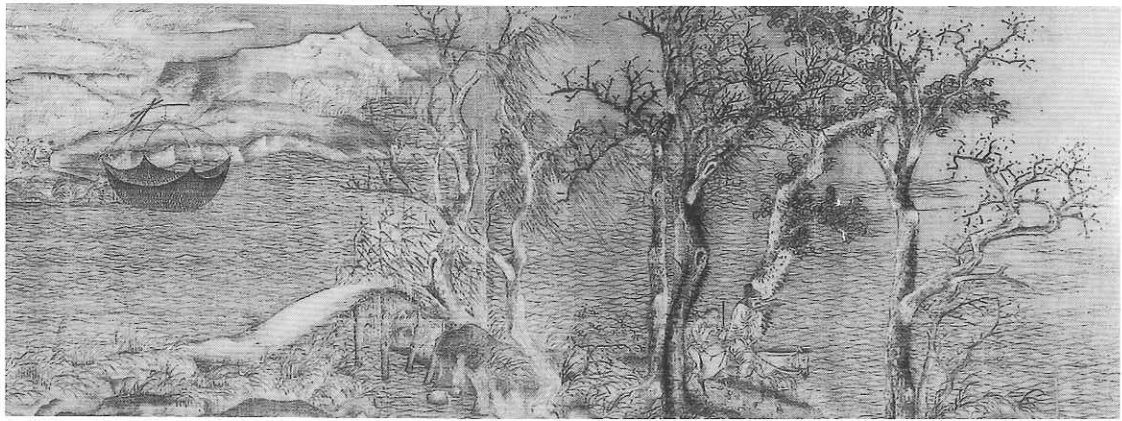


图63 「江行初雪图卷」部分

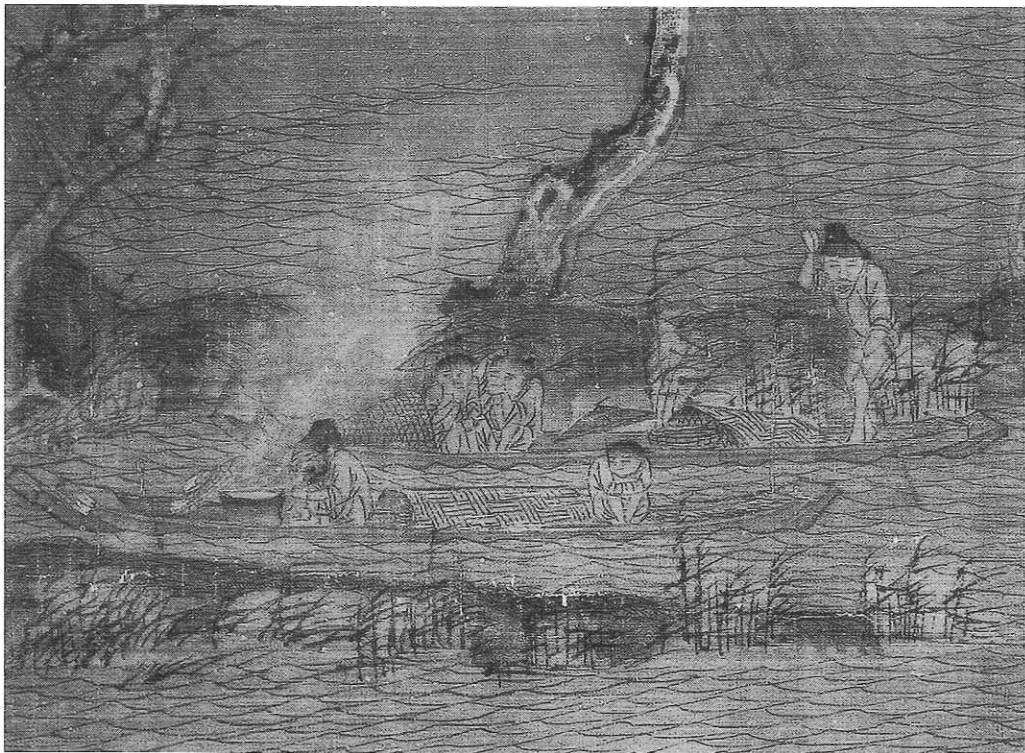


图64 「江行初雪图卷」部分

の、地面には緑青などによって彩色された部分が多い。従って両図ともに雪が降り始めたばかりの表現と見るべきである。また、どちらも樹木や土坡に明暗対比の強い陰影表現が行われており、人物も、前者では屋内での休息や帰途の様子（口絵15）が表され、後者では巻尾において舟の上で炊事（図64）が始まっていることから時間は夕刻と判断される。

これらの描写から、両図はともに冬の暮れ方の斜めに射し込む光の中、雪が舞い始めたという印象深い情景を描いていると考えられる。共通する様式から生まれたと考えられる両図が、降雪表現においても相似た状況を描いていることは、それが江南山水の雪景表現の一定式として成立、普及していたことを窺わせる。

ただし、これら二図の表現が、南唐の雪景表現の全てであった訳ではない。米芾の記述では雪景図は一般に「雪図」と称されており、その簡明な呼称からは、一面に雪が積もった明快な画面が相応しいように思われる。

北宋には伝王維画の雪景図に加え、小景で有名な趙令穰（？～一〇六一～一〇〇〇？）らもそれに類する雪景を描いていた。²⁰ これら伝王維画ないしはそれに類する北宋の雪景図の概要をうかがわせるものとして、（伝）王維「江干雪意図卷」（台北故宫博物院、図65）、（伝）王維「長江積雪図卷」（ホノルル美術館、図66）、（伝）王維「江山雪霽図卷」（個人）などの伝称作がある。²¹ 三図には図様の共有がみられ、共通の祖本から派生したことが分かる。いずれも模写による写し崩れや後世の様式が付加されているが、なお北宋以前の様式をとどめている部分も指摘でき、樹法などに江南画や小景画の影響を見ることもできる。これらの雪景表現を見ると、いずれも素地の白さを活かして積雪の表現としてお

り、山岳をはじめ陸地全体に雪が降り積もった、より一般的な雪景表現となっている。

このような作品の存在を考慮すれば、江南画の雪景表現には、山野一面が雪に覆われているものから、「寒林重汀図」と「江行初雪図卷」のような降り始めの状況を描くものまでが含まれていたと考えられる。積雪量が比較的少ない江南の地域性を考えれば、わずかに空に舞い始めた少量の降雪にも関心が注がれ、また時折訪れる大量の積雪は、見慣れた景色を一変させる感動的な現象と感ぜられたであろう。しかも、「寒林重汀図」と「江行初雪図卷」に見られるように、それらは夕暮れの光や大気の表現、人物の行動とも相まって、極めて具体的かつ微妙な時間や天候の状態を表現していたのであり、当時の江南山水画の自然再現が、既に相当に高度な発達を遂げていたことが理解される。

このような南唐における雪景図の盛行、発達は、どのような絵画史的展開を経て成立したものであろうか。この問題は、以下に述べるように、中唐から五代にかけての山水主題と水墨表現の関係を考える上からも重要であるが、現存作品に乏しく、現時点で精密な議論を行うだけの材料を持ち合わせていない。しかし、晩唐までに雪景図が相当に普及していたことは、北宋・郭若虚『図画見聞誌』巻五、故事拾遺に載せられる、晩唐の詩人・鄭谷（八五一？～九一〇？）の雪景を詠った詩が評判となり、絵画化されたという「雪詩図」の逸話からうかがうことができる。²²

唐鄭谷有雪詩云、乱飄僧舍茶煙湿、密灑歌樓酒力微。江上晚來堪画
処、漁人披得一蓑帰。時人多伝誦之、段賛善善画 歷代名画記中有段去
惑、豈非宮贊。因採其詩意景物图写之、曲尺蕭灑之思、持以贈谷。谷
珍領之、復為詩寄謝云、賛善賢相後、家藏名画多。留心於絵素、得



図65 (伝)王維「江干雪意図卷」部分 (台北故宮博物院)



図66 (伝)王維「長江積雪图卷」部分 (ホノルル美術館)

事在煙波。屬興同吟詠、功成更琢磨。愛余風雪句、幽絕写漁簑。

(画史叢書本)

鄭谷の第一詩は、「僧舎に乱飄して茶煙湿い、歌樓を密灑して酒力微なり。江上晩来 画処に堪う、漁人披り得たり 一簑帰る」と、雪の日の僧舎や酒樓、暮れ方の江上を簑を着て帰る漁夫といった景物を詠ったものである。これが評判となり、段賛善なる画家⁽⁷⁴⁾によつて絵画化され鄭谷に贈られたのである。鄭谷は第二詩を作つて応えており、その尾聯に「余の風雪の句を愛し、幽絶に漁簑を写す」とあることによつても、その描写が想像される。

雪の降り積もる暮れ方の江上を、一人の漁夫が簑をかぶつて帰る情景は、中唐の柳宗元(七七三―八一九)の有名な「江雪」の詩とも視覚的に近く、後世の「寒江独釣図」のような作品が、晩唐には既に作られ始めていたのではないかとも思わせるものがある。その想像は措くとしても、「江上晩来」の眺めを「画処に堪う」とした発想は、この時期には詩人が眼前の雪景を絵画表現と重ね合わせてイメージできるほどに、雪景図が普及していたことを示している。

しかも、その詩が流行し、人々の口ずさむところとなつたということは、実際の雪景と絵画を結び付ける発想が、人々に注目されるだけの新鮮な感覚を持つていたことを思わせる。そして、詩が流行したことにより絵画化されるといふ詩と画を巡る循環からは、雪景図自体も、画家の制作意欲を喚起する新鮮さを持つ画題であつたことが窺える。

戸田禎佑氏は、唐に始まつた初期の水墨画においては、モノクロームで表現しやすい雪景が多く描かれる状況があつたのではないかと想定し、それが北宋時代に一時代前の南唐や蜀の雪景図が王維に結びつけられる

に至つた背景ではないかとされる⁽⁷⁵⁾。確かに水墨画の形成期において、雪景は水墨の特性を活かせる魅力的な画題であつたと思われ、上述の晩唐期の雪景図の普及との関係が注目される。

鄭谷の第一詩が、暮れ方の景を取り上げて「画処に堪う」としていることは、この問題に関して重要な示唆を与えてくれる。一般に水墨の雪景図では、地面を白く表現する都合上、通常は余白となる空や水には逆に淡墨が施されることが多い。その場合、時間表現としてより合理的なのは夕暮れや夜であり、実際に北宋以降の作品においては、雪景を夜景とする例が少なくない⁽⁷⁶⁾。このことを踏まえれば、中唐から五代にかけての水墨画の発生、発展期において、雪景表現と夕方や夜といった時間表現は互いに深く結びついていたものと推察される。つまり鄭谷の第一詩が、「江上晩来」の眺めを画とするのに相応しいとした背景には、当時制作されていた雪景図の多くが晩景を描いていた状況があり、それを絵画化した段賛善の作品は、まさに水墨と雪景、晩景の絵画的な結びつきの上に生まれた作品であつたと位置づけられる。

このように見てくると、「寒林重汀図」と「江行初雪図巻」もまた、水墨と雪景、晩景の絵画的な関係の中に生まれた作品と見ることができ。ただ両図は、時間は暮れ方であるが、素地を雪とする水墨の特性を利用した積雪表現は採っていない。このことは、南唐の雪景図の描法が一つの定式に限らない広がりを持つていたことを示すと同時に、董源や江南山水画における水墨と着色という画材の問題を考える上でも示唆を与えてくれる。

「寒林重汀図」を始めとする董源の伝称作品には、水墨を基調としつつも、人物には濃彩が施されるなど彩色が併用されている。白色顔料による降雪表現もこのような着色併用の一端と言え、董源や南唐の水墨山

水が着色を廃除せず、むしろ適宜併用を図っていた状況を窺わせる。

「江行初雪図巻」では、彩色の使用がより顕著である。樹木、土坡の輪郭、陰影などは水墨技法を基調としているが、水面には藍が掃かれ、土坡と草木の葉には緑青や染料系の緑が入られるなど彩色が多用されている。冬という季節的な条件から緑青などの鮮やかな色彩は控え目に用いられているが、逆に言えば雪景に必須ではない濃彩を敢えて使用している点は、状況に合わせて水墨表現と着色表現を自在に併用できる技術が備わっていたことを推察させる。

『図画見聞誌』卷三、董源条では、董源の山水画には水墨と着色があり、前者は王維に、後者は李思訓に似ていたとする。しかし上記の観点から考えれば、着色と水墨を明確な区分をもつ二画風として描き分けたとみるよりは、実際には併用されており、純粹な水墨表現と純粹な着色表現との中間に存在する様々な位相の作品を手掛けていたものとの推察が得られる。

唐から北宋までの山水画の動向を画材の点から見ると、盛唐までは着色の所謂青緑山水が主であったものが、中唐に水墨画が誕生して以降、徐々に水墨山水が優勢となり、北宋にはその優位が確定するという大きな流れが見られる。董源の活躍した五代は、ちょうど着色から水墨への過渡期であり、彼はその転換点にあつて伝統的な着色技法と新興の水墨技法の双方を習得し、その間で制作を行っていた画家と位置付けることができる。

以上、「寒林重汀図」の降雪表現を起点に、唐から五代にかけての雪景図について考察し、水墨表現との関係などについても触れた。けれども、このような絵画表現上の問題のみが雪景図を発展させた訳ではないであろう。雪景を描き、鑑賞した当時の人々の中に、その画に対する何

らかの思いがなければ、絵画的発展も生まれなかつたはずである。唐から五代の雪景図とは、どのような意味やイメージをもつ画題であつたのだろうか。本稿の締め括りとして、「寒林重汀図」（の原本）において画家が何を描こうとし、それを見た当時の人々がどのような思いを抱いたのかを探ってみたい。

ここで試みるのは、本図の描写と類似する内容を持った文学作品を参考とする方法である。五代の江南地方で作られた詩には、「寒林重汀図」を始めとする江南山水画の描写と関連するものがあり注目される。

一つは、南唐に仕えて考功員外郎などを務めた伍喬の「冬日道中 一作冬日送人」（『全唐詩』卷七四四）である。

去去天涯無定期、瘦童羸馬共依依。

暮煙江口客來絕、寒葉嶺頭 一作前 人住 一作往 稀。

帶雪野風吹旅思、入雲山火照行衣。

釣台吟閣滄洲在、応為初心未得歸。（中華書局本、以下引用同本）

この詩は、科擧受験あるいは官遊などの際の旅情を詠ったものである。首聯では「去去の天涯 期を定むる無く、瘦童と羸馬 共に依依たり」と、意のままにならぬ旅の身の上と、童僕と瘦せ馬の寄り添う様を言い、頷聯では「暮煙の江口 客來たる絶え、寒葉の嶺頭 人住むは稀」と、暮れ方の渡し場の往来が途絶えた様子や、落葉した山のふもとの寂しい村里の様子が述べられる。続く頸聯においては「帶雪の野風 旅思を吹き、入雲の山火 行衣を照らす」と、吹き付ける風雪と雲間に見える山の火に、冬の辛く寂しい旅情が象徴される。

夕暮れの江口、人々の往来も少なくなった寒村と、吹き付ける風雪と

いった状況は、そのままではないにせよ「寒林重汀図」の描写内容と相近い。また、第二句の「瘦童と羸馬 共に依依たり」という表現は、「江行初雪図巻」の寒さに凍えながら旅する士人一行の姿を彷彿とさせる(図67)。

また、唐末五代の人で晩年に南唐の列祖・李昇(在位九三七〜九四三)に仕えた沈彬(八六二頃〜九六一?)の「金陵雜題二首」(『全唐詩』卷七四三)も、江南の旅における風物を詠み込んでおり注目される。



図67 「江行初雪図巻」部分

王氣生秦四百年、晋元東渡浪花船。
正慚海内皆塗地、來保江南一片天。
古樹著行臨遠岸、暮山相亞出微煙。
千征万戰英雄尽、落日牛羊食野田。

暮湖声落草光沈、賈客來帆宿岸陰。
一笛月明何処酒、滿城秋色幾家砧。
時清曾惡桓温盛、山翠長牽謝傅心。
今日到來何物在、碧煙和雨鎖寒林。

この詩は、作者が金陵(江蘇省南京)を訪れた際、六朝の古都への感慨を、周囲の風物を交えて詠ったものである。第一首では、前半部で西晋(二六五〜三一六)が異民族の侵入によって華北を奪われ、江南へ逃れたことを述べ、頸聯において「古樹著行し 遠岸に臨み、暮山相亞し 微煙を出だす」として、金陵付近で目にした、老木が繁って岸へと続く道や、夕霞のたなびく山々といったもの寂しい情景が詠われる。その情感は尾聯の「千征万戰 英雄尽き、落日に牛羊は野田を食む」においてさらに高められ、いにしへの英雄も今は跡形もなく、ただ夕日の沈む田野に牛や羊が草を食んでいるのみと、歴史の無常が印象的に示される。

二首目では前半部において「暮湖声落ちて草光沈み、賈客來帆して岸陰に宿す。一笛月明 酒は何処、滿城秋色 砧は幾家」と、金陵での体験が示される。湖辺の夕暮れに、船でやってきた旅人たちは岸边に(舟を着けて)泊まる。月明かりの中、流れる笛の音に酒を求め、晩秋の氣配が漂う城内では、家々から砧を打つ音が聞こえてくる。頸聯では東晋

(三一七～四二〇)の武将・桓温(三二二～三七三)や宰相の謝安(三二〇～三八五)に思いをめぐらせ、その上で尾聯では「今日到来すれば何物かある、碧煙雨に和し寒林を鎖さず」と、今に残されているのは、青みがかった雲煙が雨と相まって、寒林を煙らせているだけであると、ここでも無常観を示して締め括っている。

作者の目に映った金陵の風物に注目すると、岸に臨む古樹、微煙の漂う暮山、湖辺での宿りと夜の酒などは「寒林重汀図」の描写内容とも重なりあうことが指摘できる。二首目の最後の句では、降っているのは雨であるが、これも寒林に降る晩秋の氷雨であり、歴史の無常や旅の寂寥感を示している。また「落日に牛羊は野田を食む」というモチーフは、現存作品では(伝)董源「夏山図巻」(図68)に見え、趙孟頫「鵲華秋色図巻」(図69)にも取り入れられており、江南画の伝統的なモチーフと解される。

以上の考察を踏まえると、「寒林重汀図」の描写は、当時の鑑賞者にとっては江南の冬の旅情を誘うものであったと考えられる。特に近景に描かれた宿場とそこに憩う人々、夕暮れの道を急ぐ庶民の姿から呼び起こされるのは、一夜の宿りと、旅の疲れを癒して体を温めてくれる酒のイメージである。⁽⁷⁰⁾五代北宋の山水画では、士人や庶民が旅する様を描く行旅図が多く制作されている。本図もその性格を含んでいる訳であり、行旅図の成立や意味を考える上でも注目される。

中唐から晩唐にかけては科擧が定着し、出身に関わらず才覚によって登用された文人官僚が次第に増加していった時期である。⁽⁸⁰⁾詩作はその重要な課題とされたため、必然的に士夫層の作詩能力の拡大をもたらした。しかし、科擧に合格し栄達の道を手に入れる者がある一方で落伍者も多く、またたとえ合格しても望ましい官職につけるとは限らず、地方へ左



図68 「夏山図巻」部分

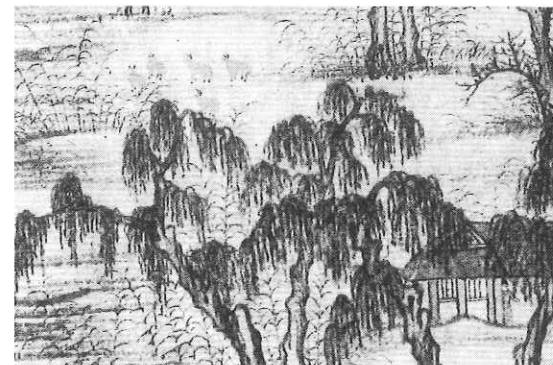


図69 「鵲華秋色図巻」部分

遷されることも少なくなかった。そのため、勢力を持った各地の節度使に仕える者が増えもした。

そのような状況は、作詩能力を備えた士人たちが、科擧受験のための上京や赴任地などへの旅行の際、目に映った自然や風物を自己の境遇とともに詠じる契機となっていくた⁽⁸¹⁾と考えられる。また、安史の乱(七五五～七六三)以降の唐王朝の衰退や、滅亡後の五代の混乱は、士人たちの心理にも少なからず影を落としていったであろう。伍喬や沈彬のように旅情、旅愁を景物とともに詠う詩の背景は、「寒林重汀図」のような絵画作品が描かれていく基盤でもあったと考えられる。

以上、「寒林重汀図」の描写内容が、江南地方を旅する際の旅情と関係深いことを確認した。次に、唐から五代詩における「雪」そのもののイメージに注目してみたい。中国文学の雪のイメージについては、六朝文学を中心に研究が進んでいる。⁽⁸²⁾それらを参考に唐詩における雪の詠わ

れ方を、筆者なりに分類してみたところ以下の様になった。

- ① 豊作をもたらす瑞祥として詠うもの。
- ② 花や玉などに見立て、雪の白さや清らかさなどを耽美的に詠うもの。
- ③ 害悪や苦寒を引き起こすものとして詠うもの。
- ④ 雪景を状況に即して叙景的に詠うもの。

①は『詩経』小雅、「信南山」を古例とし、六朝時代の詠雪賦、詠雪詩から唐代に引き継がれるイメージで、太宗「喜雪」（『文苑英華』卷一七三）、張説「応制奉和「奉和聖製義成校獵喜雪应制」」（『張説之文集』卷三、「」は『全唐詩』卷八六による）など、皇帝自身の作や臣下が主命を受けて詠んだ应制が典型的な例である。

②も六朝の詠雪賦、詠雪詩からの伝統を受け継いでおり、上官儀「詠雪」（『唐詩紀事』卷六）、宋之問「苑中遇雪应制」（『宋之問集』卷下）など雪見の宴などの作に多く見られる。

③は岑参「白雪歌送武判官归京」（『岑嘉州詩』卷二）のように胡地における雪の厳しさを詠ったもののほか、盧仝「苦雪寄退之」（『玉川子詩集』外集）など自分や周囲、或は民の困窮を述べたものが多い。

④は先に挙げた鄭谷「雪中偶題」（『鄭守愚文集』卷一）もその例であるが、柳宗元「江雪」（『増広註釈音弁唐柳先生集』卷四三）のように、自らの不遇やそれに耐える高潔な志が重ね合わされているものもある。なお、①～④は必ずしも厳密な分類ではなく、一つの詩の中に複数の要素が共存することも多い。

以上のような唐詩における雪のイメージの概括は、雪景図の意味を考える上でも参考となる。とりわけ、本章の観点から注目されるのは、

董源が宮中で催された雪見の宴の様子を合作したという先述の故事と、①および②との関わりである。先に挙げた『江表志』では、その後の中主と臣下の詠んだ詩が載せられており、雪を豊作の瑞祥とし、また花や玉などに見立てて耽美的に詠う伝統が、南唐の宮廷においても受け継がれていたことを証している。

この点を考慮するなら、雪景図とは吉祥や賞雪のイメージをもはらむ主題であり、董源のように宮中に仕えた画家が主君のために描くものにも相応しい性格を有していたと考えられる。「寒林重汀図」は、描写内容に即して考えれば、むしろ③や④のイメージの方がより強く意識されるように思われるが、このような作品も宮中や貴顕の邸宅などで催された宴の席で鑑賞された場合には、①の吉祥的な面、あるいは②の耽美的な面が強調されることも多かったのではないかと思われる。

雪景図の意味を考える上で、もう一つ重要なのは、東晋の王徽之（字・子猷、？～三八八頃）が、雪の夜に隠者の戴逵（？～三九六）とともに雪景色を楽しもうとはるばる訪ねていったが、門までたどり着くと興が尽きたので会わずに帰ったという、有名な「雪夜訪戴（子猷尋戴）」の故事（『晋書』卷八〇、王徽之伝、『世説新語』任誕篇）である。この逸話では結果的に雪見の会は実現しなかった訳だが、雪見は文人たちの集う格好の機会であり、雪景図には訪友、会飲のイメージを含むものも多いと思われる。⁸³「寒林重汀図」にも、前章で確認したように近景や中景には酒店が描かれており、また近景右には隠者などの住まいと見られる屋舎も描かれている。積極的に文人の集いを表している訳ではないが、状況によってはこのような方向での鑑賞も可能な内容を備えている点は、留意すべきであろう。

おわりに

「寒林重汀図」をめぐる諸問題を可能な限り取り上げてきた。様式面に関する総括はすでに第二章の(三)に記したので、ここでは第三章のまとめとそこから派生する論点への見通しを述べて稿を終えることとしたい。

「寒林重汀図」の雪景表現は、降り出した雪を冬の夕暮れの光とともに描くという、天候、季節、時間の表現が一体となった高度な描写を達成していた。それは、唐から五代にかけての水墨表現の発達と深く関わるとともに、江南山水画における水墨、着色表現の併存状況をも伝えるものであった。

内容面については、江南の冬の旅を詠った当時の詩との関連が注目された一方で、雪を豊作の瑞祥や美しいものとして詠う伝統的なイメージも指摘された。五代の江南において雪景図が盛んに制作された背景としては、雪景図の多様なイメージが様々な状況における鑑賞に込めていたことを想定すべきであろう。

描写内容やモチーフについて様々な論じてきたように、山水画においては、特定の故事など典拠のある場合を除いては、厳密な意味での図像がある訳ではなく、描かれた景色や点景はその個々が何らかのイメージを有しており、多様なイメージが強弱を持ちつつ画面中に併存しているのが実際のあり方だと思われる。

その意味では、本図にはなお多くのイメージ、例えば董源が暮らした南京周辺や彼も描いた可能性のある瀟湘地方などの江南の風土そのものについて、或は落照、寒林、漁村などについてのイメージが含まれていると考えられる。それらについても目を向ければ、より深い意味が見出

され、本図や当時の山水画への理解が広がるはずであるが、今回は考察が及ばなかった。今後の課題としたい。

今回、一つの作品について、文献や観察から知り得た情報を可能な限り紹介し、考察を加えた。論点が多岐に渡り冗長に過ぎるとの意見もあるかと思うが、作業を終えてみて、このような作品の基礎研究は、むしろ各論的な論文の精度を高める意味からも必要であり、近年ますます盛んになってきている科学調査を効果的に進めるための基礎ともなると考える。ここに試みたような研究方法は、筆者ら博物館の現場に勤務する学芸員でも、収蔵品によって行うことができる。いつの日か、多くの作品の基礎研究が発表され、それらを眺めながら作品とその背後にある歴史に思いを馳せる、そんな日が来ることを願っている。

註

(66) (上) 編発表後、董源についての先行研究と「寒林重汀図」の伝来に関する新たな知見を得たので、追記しておく。

Howard Rogers, "Tung Yuan Chronicle," *Kaikodo Journal*, XII, 1999.

本文献は、台湾大学芸術史研究所の王静靈氏から教示いただいた。

明初の道士・張宇初『峴泉集』(二四〇七年序) 卷四に次の長詩がある。

題吳至靈葆和藏董元寒林重汀図歌

曾讀屈騷語、悵然懷遠遊。空山高臥日慵起、對此宛歷江湖秋。重汀回抱別淑隱、洞庭木落湘妃愁。不將巧趣混天真、寒林杳靄迷烟氣。鳧翳散亂已冥邈、漁舍西三知幾春。江南此景興莫比、霜冷蒹葭長新水。長松影落空籟鳴、小艇殘陽歸鴈尾。吳網近著風霆脈、雲笈深藏窺莫得。野渚平川憶故園、林原入夢經年隔。願我曾追老画師、層巒疊嶂探幽奇。荊門雅澹推董李、隋珠定值今誰知。明日京華理婦漿、空澗神情夢中想。月際潮生晚思多、孤蒲過雨寒風響。

(四庫全書本)

黒川本の描写を思わせる部分もあるが、具体的な関係は不明で、所蔵者

の呉至靈葆和についても調査が及ばなかった。なお、『峴泉集』は『道藏』にも収められているが本詩は未収録である。

また、二〇〇四年の秋に、台北西ロータリークラブの台湾文化奨学金の助成を受け、約三週間、故宮博物院の短期研修員として滞在した。その際、研究発表の機会を得、(上)編の内容に(下)編の見通しも含めた報告を行った(九月二日、於同院図書文献館)。発表後、『故宮文物月刊』へ掲載の話をいただき、骨子を次の文章で紹介した。

拙稿、許嘉旂訳「(伝)董源へ寒林重汀図」的観察と考察―兼談美術史上二件作品基礎研究的意義」(『故宮文物月刊』二六五号〔第二三卷第一期〕、二〇〇五年)。

研修中は書画処処長の王耀庭氏をはじめとする処員各位の交誼を得、副研究員の陳階晋氏には発表の際の通訳から原稿の翻訳監修までを引き受けたいだいた。この場をかりて感謝申し上げたい。

(67) 『画史』が言う蜀画の「驪綱図」、「劍門関図」といった画題が、多く雪景表現ともなっていたことは、同書の次の条にも窺うことができる。

高公絵字君素「中略」又有唐蜀中画雪山。世以為王維也。劍門関図雪景、五代筆也「後略」。

このような蜀の雪景図は、南宋「盤車図」(北京故宮博物院、(上)編図50)などの先例として興味深い、ここでは簡単に触れておくに止めらる。

(68) 画品叢書本は、「易余歲余小木、一筆纏起」とするが、引用者の判断で改める。

(69) ほほ同様の記述は清・呉任臣『十国春秋』卷一六にも、北宋・陶穀『清異録』を引くとして掲載されており(ただし、現行の『清異録』には、未収録)、北宋・郭若虚『図画見聞誌』(一〇七四年以後)卷六、近事にも「賞雪図」の逸話として載せられている。

いずれの文献も宴が行われたのは保大五年(九四七)のこととするが、この点については、夏承燾「南唐二年年譜」(同氏『唐宋詞人年譜』、上海古典文学出版社、一九五五年)に考証があり、出席者である徐鉉の「御製春雪詩序」(『徐公文集』卷一八)などの記述に基づき、保大七年とすべきであるとされる(九八頁)。

(70) 『画史』

宗室「趙」令穰大年作小軸清麗。雪景類世所収王維、汀渚水鳥、有江湖意。

また、同書によれば北宋前期の王士元も、江南画に類する雪景を描いたという。

王士元山水作漁村浦嶼雪景、類江南画。王鞏定国収四幅、後与王晋卿。命为王右丞矣。趙叔益伯充处有摹本。

(71) これらの伝王維画については、次の論文を参照。

米澤嘉圃「伝王維筆長江積雪図について」(同氏『中国絵画史研究・山水画論』東京大学東洋文化研究所紀要別冊、一九六一年)。

戸田慎佑「中国絵画の鑑賞(三) 伝王維筆「江干雪霽図」」(『新釈漢文大系 季報』三号、明治書院、一九七四年)。

Wen Fong, "Rivers and Mountains after Snow (Chang-shan Hsieh-chi), Attributed to Wang Wei (A.D. 699-759)," *Archives of Asian Art*, XXX, 1977.

島田英誠「高克明と高克明派」(『跡見学園女子大学紀要』一八号、一九八五年)。

(72) この逸話のもとになった鄭谷の詩は、『鄭守愚文集』(四部叢刊続編本)卷一、卷三をはじめとする現行のテキストにも収められている。宋版の影印である『鄭守愚文集』は、最も基本的なテキストではあるが、『図画見聞誌』を含む他本が画家名を「段替善」とするのに対し、『陳替善』とするのを始め、幾つかの字句に異同が見られる。校勘は省略するが、総合的に見て四部叢刊本をそのまま使用することは躊躇されるため、ここでは説話としてもまとまっている『図画見聞誌』を引用することとした。

(73) 段替善については、第二詩の「替善賢相後」の句から、中唐の宰相・段文昌(七七三〜八三五、段成式の父)の一族ではないかと考えられている。

嚴壽激、黃明、趙昌平箋注『鄭谷詩集箋注』(上海古籍出版社、一九九一年)一四七〜一四八頁。

なお、『図画見聞誌』は、唐・張彦遠『歷代名画記』(八四七年序)卷九に名前のみ記される段去惑ではないかとするが未詳である。

(74) 戸田氏、前掲「中国絵画の鑑賞(三) 伝王維筆「江干雪霽図」」、二〜三頁。

同氏「色と光―水墨画発生のメカニズムに関する一提言―」(『MUS EUM』四三九号、一九八七年)四頁。

(75) 水墨による雪景と夜景表現との関係については、次の論文に指摘がある。

板倉聖哲「唐宋絵画における夕・夜景表現―その素材との関わりについて―」(『美術史』一三四号、一九九三年) 一三九頁。

なお、本稿に挙げた(伝)王維「江干雪意図卷」、「長江積雪図卷」には、寒林の周辺を飛び交う鴉の群れが描かれており、夕刻を示すものと考えられる。また、南宋時代の「夏秋冬山水図」(春景欠、久遠寺、金地院)の冬景のように、四季山水図では、四季と一日の循環を対応させる意味からも、冬景を夜景とする例が多い。瀟湘八景図のうち、雪景である江天暮雪が夜景であることも注意される。

(76) 本詩は『全唐詩』(一七〇七年)のもととなった清初の錢謙益・季振宜輯『唐詩(全唐詩稿本)』(一六七三年序)や、『全唐詩』より刊行が若干早い清・席啓寓輯『唐詩百名家全集』(一七〇二年序)にも収録されているが、早い時期のテキストは知られないため、ここでは最も普及している『全唐詩』を用いた。

なお、南宋・陸游『南唐書』列伝、卷二二の伍喬の伝には、「詩調寒苦、每有瘦童羸馬之嘆」(四部叢刊統編本)と、本詩の一部を引用して彼の詩風を評している。

(77) 嚴密には沈彬が仕えたのは、李昇がまだ楊氏の呉(九〇二〜九三七)の配下にあった時期であるとすると考証がある。

周祖謙、賈晋華「沈彬」(傅璇琮主編『唐才子伝校箋』第四冊、中華書局、一九九〇年)四五〇〜四五四頁。

なお、生没年についても同書を参照した。

(78) 本詩は第一首、第二首が明末の胡震亨輯『唐音統籤』(一六三五年頃)巻七六五に、また第二首のみが清・顧有孝輯『唐詩英華』(一六五七年序)巻一五(『全唐詩稿本』はこれを用いる)に収録されるが、それ以前のテキストは知られないため、『全唐詩』を用いた。

(79) 江南の雪と宿泊、酒を詠った詩としては、晩唐・李群玉「江南」(『李群玉詩集』後集卷四)もある。

鱗鱗別浦起微波、泛泛輕舟桃葉歌。斜雪北風何処宿、江南一路酒旗多。

(80) 唐代の科挙については、次の文献を参照。
宮崎市定『科挙史』(平凡社・東洋文庫四七〇、一九八七年)。

村上哲見『科挙の話』(講談社・講談社学術文庫一四二六、二〇〇〇年)。

(81) 岩城秀夫「柳絮と白雪―晋宋間の美意識―」(『学林』二八・二九号、中国芸文研究会、一九九八年)。

佐藤大志「中国古典文学に於ける「雪」序説―左思「招隱」詩「白雲停陰岡」をめぐって―」(『山本昭教授退休記念中国学論集』白帝社、二〇〇〇年)。

佐藤大志「中国古典文学に於ける「雪」―東晋、劉宋期を中心に―」(『新しい漢字漢文教育』三一号、全国漢文教育学会、二〇〇〇年)。

原田直枝「劉琨「雪賦」をめぐって」(『興膳教授退官記念中国文学論集』汲古書院、二〇〇〇年)。

(82) 唐代の喜雪詩については、次の論文がある。

矢嶋美都子「豊作を言祝ぐ詩―「喜雨」詩から「喜雪」詩へ―」(『日中中国学会報』四九集、一九九七年)。

(83) 『江表志』(本文中において引用した記事の続き。改行は引用者による)。

侍宴詩纒記教篇而已。
御製詩云。

珠簾高捲莫輕遮、往往相逢隔歲華。春氣昨朝飄律管、東風今日散梅花。素姿好把芳姿掩、落勢還同舞勢斜。坐有賓朋尊有酒、可憐情味屬農家。建勳詩云。

紛紛忽降当元會、著物輕明似月華。狂灑玉墀初散絮、密粘宮樹未妨花。廻封双闕千尋峭、冷压南山万仞斜。寧意晚來中使出、御題宣賜老僧家。徐鉉詩云。

一宿東林正氣和、便隨仙仗放春華。散飄白絮難分影、輕綴青旂始見花。落砌更依官舞轉、入樓偏向御衣斜。嚴徐更待金門詔、願布堯言賀万家。義方詩云。

恰當歲日紛紛落、天寶瑤花助物華。自古最先標瑞牒、有誰輕擬比楊花。密飄粉暑光同冷、靜压庭枝勢欲斜。豈但小臣添興味、狂歌醉舞一千家。

なお、この宴の参加者の一人である徐鉉には、春雪を詠った次の詩も伝わっており、雪を瑞祥としている。

春雪心制(『徐公文集』卷五)

繁陰連曙景、瑞雪灑芳辰。勢密猶疑臘、風和始覺春。

蔡林開玉藥、飄座裏香塵。欲識宸心悅、雲語慰兆人。

(民国八年南陵徐氏用紹興一九年明州刊本影印本)

(84) 例えば、後代の作品になるが、明・張路「道院馴鶴図」(個人)の近景には、室中に座る二人の人物と、酒が入っていると思われる壺を持って訪れた人物が描かれている。

〔図版出典一覧〕

掲載図版のうち、「寒林重汀図」以外の作品については、以下の刊行物から複写させていただいた。

図12、13、16、18、57、58、68 『中国美術全集 絵画編二 隋唐五代絵画』(文物出版社、一九八八年)。

図14 『世界美術大全集 東洋編 第三卷 三国・南北朝』(小学館、二〇〇〇年)。

図15 『日本美術全集 第三卷 正倉院と上代絵画 飛鳥・奈良の絵画・工藝』(講談社、一九九二年)。

図19、35 『故宮博物院 第三卷 元の絵画』(日本放送出版協会、一九九八年)。

図21、22 『世界美術大全集 東洋編 第五卷 五代・北宋・遼・西夏』(小学館、一九九八年)。

図27 『大阪市立美術館蔵・上海博物館蔵 中国書画名品図録』(《中国書画名品展》実行委員会、一九九四年)。

図28 『中国の美術 三 絵画』(淡交社、一九八二年)。

図29、40、50 『中国美術全集 絵画編四 両宋絵画 下』(文物出版社、一九八八年)。

図30、38 『中国の博物館 第三卷 遼寧省博物館』(講談社、一九八二年)。

図32、33、34 『故宮書画図録 第一五卷』(国立故宮博物院、一九九五年)。

図39、59 『故宮書画図録 第一卷』(国立故宮博物院、一九八九年)。

図42 『文人画粹編 中国編二 董源 巨然』(中央公論社、一九八五年〔新装愛蔵版〕)。

図43 『故宮博物院 第一卷 南北朝・北宋の絵画』(日本放送出版協会、一九九七年)。

図45、46、49、53、55、67 『台北・国立故宮博物院珍藏書画』(二玄社、

発行年不記載)。

図48、69 『世界美術大全集 東洋編 第七卷 元』(小学館、一九九九年)。

図52 江上綏、小林宏光『南禅寺所蔵「秘藏詮」の木版画』(山川出版社、一九九四年)。

図60、62 『宋代の絵画』(大和文華館、一九八九年)。

図61 『東洋美術 第一卷 絵画I』(朝日新聞社、一九六七年)。

図63、64 『故宮書画菁華特輯』(国立故宮博物院、一九九六年)。

図65、66 『文人画粹編 中国編一 王維』(中央公論社、一九八五年〔新装愛蔵版〕)。

〔前号の訂正〕

前号において、一部に活字の印刷されなかった箇所が生じました。また、表記、用字に数箇所訂正が見つかりましたのでお詫びして訂正いたします。

印刷されなかった箇所(訂正含む) 誤 正

九八頁 註二の二二行目 韓正 韓正熙

九九頁 註七の五、七行目 緝殿 緝熙殿

同頁 同註、八行目 緝二字 緝熙二字

一〇一頁 註二三の九行目 輯殿 韓熙殿

同頁 同註、一二行目 韓正氏 韓正熙氏

同頁 註二五 一一行目 輯殿 緝熙殿

訂正箇所 誤 正

九三頁 図五六のキャプション 芦 葦

九五頁 下段五、六行目 一一三四 一一三四年

一〇一頁 註二三の四行目 蒹 葦

一〇五頁 註五八の三行目 「盤車図」 北京本